

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(24) : 開口具4 : 番目綜統1

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	294
ページ	58-60
発行年	2005-09-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5205

縦横無尽 タテとヨコの 色とかたち のフィールドワーク

24

吉本 忍

開口具4 番目綜統1

番目綜統のかたちと機能

番目綜統は、2本の綜統棒にかけられて連なった綜統系の輪の1つ1つが、2本の綜統棒の中間で、相互に鎖状に交叉して番目を構成している。この綜統では、奇数列、あるいは偶数列というような特定のタテ糸が、通常は1本ずつ、綜統系の輪を鎖状に交叉させることによってできる番目の1つ1つに通されている。たとえば奇数列のタテ糸が番目に通されているばあいには、偶数列のタテ糸は隣り合って連なる番目と番目のあいだに通されており、鎖状に交叉して番目を構成している。綜統系の輪や番目とは関係していない。また、その逆に偶数列のタテ糸が番目に通されているばあいにも、奇数列のタテ糸は隣り合って

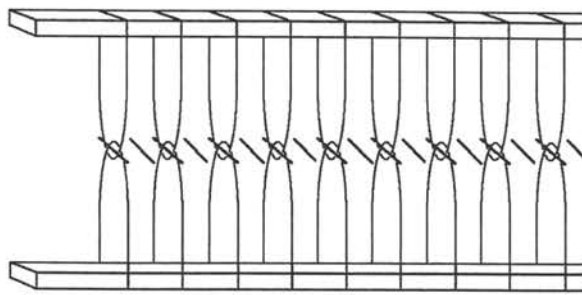


図1 番目綜統

連なる番目と番目のあいだに通されており、鎖状に交叉して番目を構成している。綜統系の輪や番目とは関係していない(図1)(写真1)。

したがって、奇数列のタテ糸が番目に通されているばあいに番目綜統を動かすと、奇数列のタテ糸のみが連動して動き、偶数列のタテ糸はまったく動くことはない。そして、偶数列のタテ糸が番目に通されているばあいに番目綜統を動かすと、タテ糸のみが連動して動き、奇数列のタテ糸はまったく動くことはない。

そうしたことからタテ糸が水平に張られている状態で、単体(1枚)の番目綜統の番目に奇数列のタテ糸が通されているばあいに、番目綜統を上へ引くと、奇数列のタテ糸が連

動して引き上げられてタテ糸が開口し、番目綜統を下へ引くと、奇数列のタテ糸が連動して引き下げられてタテ糸が逆開口する。

以上に述べていることからあきらかなように、単体の番目綜統は、それ自体でタテ糸の開口と逆開口を繰り返しておこなうことができる。ただし、これまでは番目綜統が単体で開口具として使用されている例は確認されず、後述するように番目綜統を開口具として使用している例としては、両口交互開口機能をそなえた2枚1組の番目綜統で構成された開口具と、片口交互開口機能をそなえた2枚1組の番目綜統で構成された開口具が知られているにすぎない。

なお、番目綜統のかたちについては、すでに冒頭で述べているが、その類型には、無双綜統、小間入り綜統、綜目綜統、針金綜統などがある(図2)。これらはいずれも番目をともなっていないことから、厳密には番目綜統とはいえない。しかし、いずれも番目綜統から派生的につくられたと見られるものであり、機能的には番目綜統となんらかわるものではないことから、以下では、これらも番目綜統のうちに包括されるものとしておく。

2種類の開口方式

番目綜統は単体で片口交互開口機能をそなえていることから、番目綜統で構成される開口具の型式としては、番目綜統1枚のみで構成される単式番目綜統型の開口具があっても不思議ではない。しかし、世界各地で使われている番目綜統をともなった開口具の構成には、以下に述べるような2枚1組の番目綜統で構成された複合単式番目綜統型と複式番目



写真1 カンボジアの番目綜統
(カンボジア、コストウン・タマイ村：2002年)



写真2 カメルーンの番目綜統
(カメルーン、テテ村：2000年)

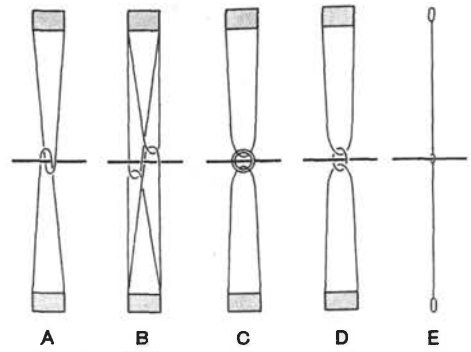


図2 番目綜統とその類型(断面)
A-番目綜統、B-無双綜統、C-小間入り綜統、D-綜目綜統、E-針金綜統

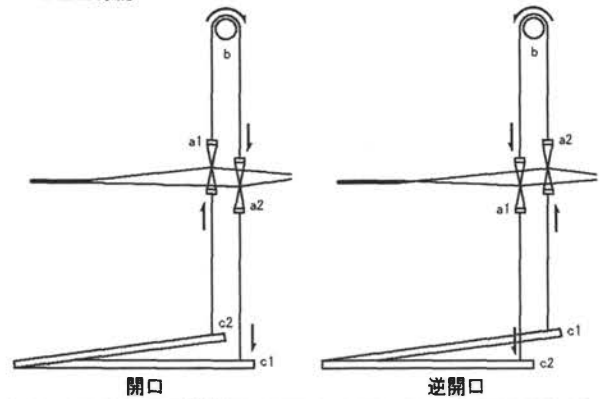


図3 複合単式番目綜統型の開口具によるタテ糸の開口と逆開口
a1~a2-番目綜統、b-ロクロ口、c1~c2-踏み木

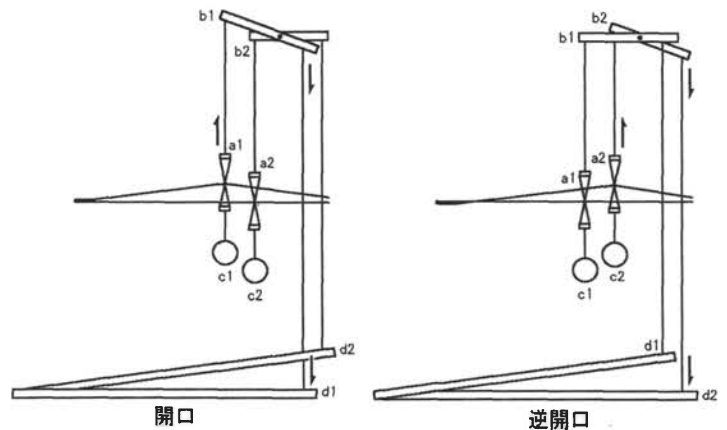


図4 複式番目綜統型の開口具によるタテ糸の開口と逆開口
a1~a2-番目綜統、b1~b2-天秤、c1~c2-錘り、d1~d2-踏み木

綜統型という2型式がある。これらの開口方式はいずれも綜統可動式であるが、それぞれの開口機能はまったく異なっている。

複合単式番目綜統型

複合単式番目綜統型の開口具は、設置方式が可動式の番目綜統が2枚1組で構成されており、開口方式は綜統可動式である。このばあいの開口具では、1枚の番目綜統の番目に奇数列のタテ糸が通され、もう1枚の番目綜統の番目に偶数列のタテ糸が通されていく。また、2枚の番目綜統はそれぞれの番目綜統を構成する上部の綜統棒が、ロクロ口掛けや天秤仕掛けなどの開口補助具を介して、直接、あるいは間接的に紐でつながれており、下部の綜統棒がロクロ口仕掛けなどとも開口補助具として機能している踏み木に紐でつながれている(図3)。

このような複合単式番目綜統型の開口具では、一般に左右の足で2本の踏み木を交互に踏みかえることによって、タテ糸の開口と逆

開口がおこなわれている。具体的には、2本の踏み木の一方を片方の足で踏むことによつて、紐で直接つながれている番目綜統が引き

下げられ、その番目に通されているタテ糸が運動して下にさがるとともに、もう一方の番目綜統が引き上げられ、その番目に通されているタテ糸も運動して上にあがってタテ糸の開口がおこなわれる。そして、引き上げられた番目綜統に紐で直接つながれている踏み木を他方の足で踏むことによつて、上にあがっていた番目綜統が引き下げられ、その番目に通されているタテ糸が運動して下にさがるとともに、もう一方の番目綜統が引き上げられ、その番目に通されているタテ糸も運動して上にあがってタテ糸の逆開口がおこなわれる。したがって、このような2枚1組の番目綜統で構成された複合単式番目綜統型の綜統可動

式の開口方式では、開口具の開口機能は両口交互開口であり、奇数列と偶数列のタテ糸は、その相対的な上下の位置関係を交互に逆転させながら両口開口することによつて、タテ糸の開口と逆開口が繰り返される。

複式番目綜統型

複式番目綜統型の開口具は、設置方式が可動式の番目綜統が2枚1組で構成されており、開口方式は綜統可動式である。このばあいの開口具では、1枚の番目綜統の番目に奇数列のタテ糸が通され、もう1枚の番目綜統の番目に偶数列のタテ糸が通されている。これらについては前記の複合単式番目綜統型の開口具とまったく共通しているが、2枚1組の番目綜統は、1枚ごとに上部の綜統棒が天秤仕掛けの開口補助具の一方の端に紐でつながれている。そしてさらに、天秤仕掛けの開口補助具のもう一方の端は踏み木に紐でつながれている。また、下部の綜統棒には紐で

錘りがつながれている(図4)。

このような複式番目綜統型の開口具では、さきの複合単式番目綜統型の開口具のばあいと同様に、一般に左右の足で2本の踏み木を交互に踏みかえることによつて、タテ糸の開口と逆開口がおこなわれている。具体的には、2本の踏み木の一方を片方の足で踏むことによつて、その踏み木に天秤仕掛けの開口補助具を介して紐でつながれている番目綜統が引き上げられ、番目に通されているタテ糸が運動して上にあがって、タテ糸の開口がおこなわれる。そして、2本の踏み木のもう一方を、他方の足で踏むことによつて、その踏み木に天秤仕掛けの開口補助具を介してつながれている番目綜統が引き上げられ、番目に通されているタテ糸が運動して上にあがって、タテ



写真4 複合単式番目綜統型の開口具をともなった錘り機による機織り
(カメルーン、テテ村：2000年)



写真3 複合単式番目綜統型の開口具をともなった枠機（高機）による機織り
(ノルウェー、マンダレン：1993年)



写真5 複式番目綜統型の開口具をともなった枠機（高機）による機織り
(中国、雲南省瀾西県芒黒村：1996年)

糸の逆開口がおこなわれる。したがって、このような2枚1組の番目綜統で構成された複式番目綜統型の綜統可動式の開口方式では、開口具の開口機能は片口交互開口であり、奇数列と偶数列のタテ糸が交互に片口上方開口することによって、タテ糸の開口と逆開口が繰り返される。

普遍的な分布と局地的な分布

今日、世界各地で使われている織機のうち、認められるさまざまな種類の綜統のなかで、番目綜統と輪状綜統はもっとも普遍的な綜統であるといえる。ただし、番目綜統で構成された開口具のうちでは、複合単式番目綜統型の開口具が世界の広範な地域に分布しているものの、複式番目綜統型の開口具については、中国の雲南省に住む傣族のもとでの局地的な使用例を確認しているにすぎない。

また、番目綜統は歴史的に輪状綜統よりもあとに出現した綜統と考えられるが、複合単式番目綜統型の開口具の普遍的な分布については、その分布が拡大する一方で、輪状綜統と開口保持具、あるいは輪状綜統のみで構成された開口具を駆逐してきた。このことは世界各地で汎用機として使用されてきた、腰機、地機、錘り機などの輪状綜統をともなった織機が、これまでに少なからず複合単式番目綜統型の開口具をともなった織機に移行してきたことを意味しており、わが国で近代以降に腰機の多くが姿を消し、それらの腰機にかわって複合単式番目綜統型の開口具をともなった高機が普及していることも、そのあらわれといえる。なお、そうした傾向は発達史的には、生産性に優れた織機型式への展開としてとらえられ、さまざまな開口具のうちで、2枚1組の番目綜統で構成された複合単式番目綜統型の開口具は、もっとも生産性に優れた開口具として位置づけられる。

番目綜統と織機型式

これまで述べてきたように複合単式番目綜統型の開口具をともなった織機は、世界各

地で使われており、それらの中には、今日、わが国で使用されている高機の大半も含まれる。わが国のそうした高機は、タテ糸の張力にもとづく織機の型式分類においては、昨年の12月号(285号)で紹介しているように枠機のうちに包括され、同様の基本構造をともなった枠機(高機)は世界の広範な地域で使用されている(写真3)。ただし、複合単式番目綜統型の開口具をともなった織機の型式としては、それらの枠機(高機)のほかにも腰機や錘り機があり、腰機は中米のグアテマラ、錘り機は中央アジアをはじめとするシルクロードとその周辺地域、ならびにアフリカ(写真4)などに見いだされる。一方、複式番目綜統型の開口具は、すでに述べているように、中国の傣族のもとで使用されていることが知られているのみであるが、その開口具をともなった織機の型式としては、枠機(高機/写真5)と腰機を確認している。

これらの開口具として番目綜統をともなったさまざまな型式の織機については、次号で詳しく紹介する。なお、すでに述べているように、これまでに開口具が単体の番目綜統で構成されている織機は確認されていないが、そうした織機が18世紀前半の沖繩に存在していた可能性をうかがわせる絵画資料として『中山傳信録』に収録された機織り図がある。これについても次号であわせて紹介する。

(国立民族学博物館民族文化研究部教授/よしもと・しのぶ)

文献

吉本 忍

1987年 「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12巻2号